

## 病院広報について ～広報誌のリニューアル～

企画課経営企画係 野崎 有紀 入野 有加  
原川 浩

### I. はじめに

昨今、日本赤十字社（本社）では広報基礎セミナー・スキルアップセミナーといった研修会の開催や各施設の取組みを評価する「もっとクロス大賞」の実施など、日本赤十字社全体の広報業務の底上げと標準化を図るよう指導に力を入れている。

他施設の広報活動を学ぶ機会が増え、当院において、まず見劣りしたのが広報誌「日赤病院ニュース」であった。これをもっと魅力あるものにするため、フルカラーに変更し、より多くの人に手にとってもらえるようデザインも一新しリニューアルすることにした。

### II. リニューアルのコンセプト

この広報誌は昭和61年4月より、患者さんおよび一般市民向けに発行している広報誌で、毎月1日発行、白黒で発行当時からデザインはほとんど変わらず現在に至っていた。今回のリニューアルのコンセプトは、1) 手にとりやすさの向上、2) ターゲットの明確化、3) 質の向上の3点を柱とした。

### III. アンケート実施に基づく内容の検討

内容を検討するにあたり、まず読者層の把握や紙面に対する意見を収集するため、来院患者さんおよび付き添いの家族を対象にアンケートを実施した。

その結果、もっとも要望の多かった医療に関する話題をメイン記事とし、写真や図を多く入れ、文章にQ&Aを取り入れるなど読みやすくする工夫をした。次に要望の多かった健康レシピは連載にし、持ち帰ってもらう確率を上げることを狙った。

読者層の中心は50～70代の女性であったが、看護師募集の広報にも役立てばと、若年層にも手にとってもらえるようデザインをやさしい感じに仕上げた。そして、表紙には当院のスタッフに登場してもらい、親しみのある紙面にイメージアップした。

### IV. 今後の展開

今回、読者層を拡大するため、新たに入院患者さんにも配布することとした。それをきっかけに、退院後の外来通院時にも手にとってもらえることを期待する。また、読者ニーズ把握のためのアンケート実施や病院広報委員会の開催により、マンネリ化を防ぎ内容を充実させていきたい。

### V. おわりに

広報誌以外にもホームページの活用やプレスリリースの発行などさまざまな媒体を通して、当院の活動を多くの人に「伝える」「伝わる」広報を実践できるよう、取り組んでいきたい。

## 病棟活動NSTにおける薬剤師の取り組み

薬剤部 堤 喜行 矢野 佳孝  
杉山 博信  
栄養課 菊池しおり

### I. はじめに

患者の中には病態や治療の過程で食事を経口摂取

できなくなることがしばしば見られる。そのような場合の栄養療法として、米国静脈経腸栄養学会のガ

イドラインでは、消化管が機能している場合には経腸栄養投与を、消化管が機能していない場合には経静脈栄養投与を選択することを推奨している。経静脈栄養投与には輸液を中心静脈カテーテルを介して投与する中心静脈栄養法 (total parenteral nutrition) と末梢静脈から投与する末梢静脈栄養法 (peripheral parenteral nutrition) があり、病態、栄養法の必要な期間、投与するカロリーや輸液の組成などによって選択される。適切な栄養管理のためには通常の食事と同じように糖質、蛋白質、脂質、ビタミン、微量元素をバランスよく組み合わせ、必要量投与する。

今回は静脈より脂質を投与する脂肪乳剤の適正使用を調査した。

## II. 脂肪乳剤の使用目的

脂肪乳剤は大豆油を卵黄由来の乳化剤によって乳化させた液体であり、3大栄養素の一つである脂質を含む製剤である。その中には必須脂肪酸のリノール酸、リノレン酸を含むため、脂肪乳剤の投与は必須脂肪酸欠乏の予防に役立つ。

また脂質は1g当たり9kcalの熱量を持ち、糖質、蛋白質と比べてエネルギー効率がよく、脂肪乳剤を使用することで心不全など水分の制限がある場合などでも多くのエネルギーを投与することができる。

脂肪摂取量は、健常人では総エネルギーの20~30%程度摂取することが厚生労働省の「日本人の食事摂取基準」の目標量に上げられており、病態に応じて総エネルギーの20~50%投与が必要となる場合がある。

## III. 脂肪乳剤の代謝

脂肪と水を乳化させた脂肪乳剤は小さな脂肪粒子が水中に漂っている状態である。静脈内に投与された脂肪粒子は、血中のHDLからアポ蛋白を獲得し、通常の食事によって吸収された脂肪と同じように、リポ蛋白リパーゼによって加水分解され、遊離脂肪酸を放出するとともにアポ蛋白はHDLに返却される。返却されたアポ蛋白は再び次の脂肪粒子の加水分解に利用される。このアポ蛋白の回転には限界があり、

過剰な脂肪粒子は高脂血症の原因となったり、またアポ蛋白と結合していない脂肪粒子は代謝されないためエネルギーにならなかつたり、異物としてマクロファージなどの網内系に貪食されたりするとされている。したがって脂肪乳剤を投与する際には脂肪が十分に代謝されるように、ゆっくりと投与しなければならない。

## IV. 脂肪乳剤の投与速度

イントラリピッド20%の添付文書には「通常、1日250mLを3時間以上かけて点滴静注する」とある。これを体重50kgの人で考えると0.33g/kg/hrとなり、図のように血中のトリグリセリド濃度は上昇していくことが予想される。一方で0.1g/kg/hrで投与した場合には血中のTG濃度は一定の高さで頭打ちされることが報告されている。

こうした背景から現在、日本経腸静脈栄養学会で推奨されている脂肪乳剤の投与速度は0.1g/kg/hrであり、この投与速度を守れば、高脂血症や免疫系への影響もないとされている。

当院採用の20%イントラリピッド100mL中には脂質が20g含まれており、体重50kgでは20%イントラリピッド100mLを4時間かけて投与することが推奨される。

## V. 適正使用の調査と結果

当院での脂肪乳剤の投与について、オーダーリングシステム上で投与速度指示があるか、ある場合には適切な指示かという点を調査し、2011年と2012年の6か月間を比較した。

2011年には処方患者119人中、投与時間指示ありは22人 (18.5%) で、適切な指示が入力されていた患者は10人 (8.4%) であった。

2012年では処方患者145人中、投与時間指示ありは62人 (42.8%)、適正使用は46人 (31.7%) であった。

これらを比較すると、投与指示がある割合が増え、指示内容も適切な投与時間である場合が多くなった。しかし短時間での投与指示も変わらず10%程度見られた。

## VI. 考 察

このように適切な時間指示が増えた要因として栄養サポートチーム (NST) の活動がある。栄養士、医師、看護師、検査技師、薬剤師など他職種による栄養の検討により脂肪乳剤の適正使用の意識が高まったと考えられる。今回の調査ではオーダーリング上の指示のみを集計しているためカルテでの指示や実際の投与時間が反映されておらず、時間指示のない処方に短時間投与が含まれている可能性がある。これからの薬剤師の病棟活動の一つとして医師や看護師に適切な情報提供を行い、薬剤の適正使用を広めていきたい。

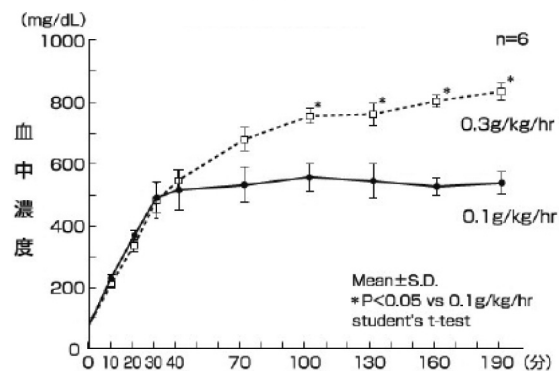


図 トリグリセリド投与速度 (イントラリピッド輸液20%IFより引用)

## 小児科予防接種外来の過去・現在・未来

小児科 西澤 和倫

## 退院支援・調整システムの強化と組織化を目指して

看護師長プロジェクト 青木 瑞江 小塚 美加  
 柿宇土敦子 山地 啓子  
 医療社会事業部 橋本 尚子  
 医事課入院係 大黒 順子 鈴木 和美

### I. はじめに

急性期病院においては、医療依存度の高い患者への退院支援・調整は重要となる。昨年本社にて退院調整看護師研修会が開催された。その中で、退院支援・調整システムが組織化、チーム化されていない施設が数施設あり、自施設はその中の一施設であった。そこで退院支援・調整システムの強化・組織化が病院としての課題となり、看護師長プロジェクトでは、退院支援・調整部門の設置を目指して取り組んできたので経過を報告する。

### II. 現状と問題点

1. 退院支援・調整を必要とする患者が増加している。
2. MSW (Medical Social Worker : 医療ソーシャル

ワーカー) と病棟看護師で行っている。総括する部門がないため、多職種連携・協働が十分にできていない。

3. 退院支援システムはあるが、介入時期や関わり方が遅いため、システムが有効に機能していない。
4. 看護師の知識不足から、退院に関連する看護・指導を診療報酬に反映させることができていない。

### III. 目的・目標

#### 1. 目的

多職種協働による退院支援・調整システムの強化と組織化を図る。

#### 2. 目標

- 1) 退院支援・調整システムを見直し、退院支援・調整が必要な患者の早期判断と早期介入を行う。